共和町立共和中学校

家庭や地域との連携による活用（道徳の時間）

中学校 第３学年	**主題名**　ふるさとのよさを伝えよう　内容項目Ｃ〔郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度〕 **教材名**　「世界遺産　知床半島」（北海道版道徳教材「はあと・ふる」） 「私たちのふるさと」（「おもてなしハンドブック　中学校」P10-12）

1　本時のねらい

郷土の発展のために尽力している地域の人々の願いや努力を感じ取り、地域社会の一員としての自覚をもって郷土に親しみや愛情をもち、進んで郷土を大切にしようとする態度を育てる。

2　教材について

本教材は、自分の住む町のよさを発見し、郷土のために自分ができることは何かを考え、友達と交流することを通して、郷土への愛着や誇りを深めていける教材である。外部講師を活用し、仕事のやりがいや郷土への願いに触れた説明を通して、郷土に対する認識を深められるようにする。

「おもてなしハンドブック」を地域人材による講話をもとに地域のためにできることを考える場面で活用することにより、道徳的実践に結び付けることができるようにする。

3　本時の展開

過程	○発問等（◎中心的な発問）　・子どもの反応	◆指導上の留意点　◇評価
導入	○　これはどこでしょうか。（「はあと・ふる」の知床半島のポスター） ・知床半島じゃないかな。 ・世界遺産に登録されているところだ。 ○　「観光客のお話」（「おもてなしハンドブック」P10）を読んで、自分の住む地域のよさを考え書き込もう。 ・共和町に住む人々はみんな優しいと思う。 ・スイカやメロンが有名だ。	 ＜「おもてなしハンドブック」P10＞
展開前半	○　自分たちの住む地域のことをより詳しく知るために、役場の商工観光係の方からお話を聞いてみましょう。 ・共和町の豊かな自然を守るように心がけている。 ・観光客にも町のよさを知ってもらいたいと願っている。 ◎　係の方のお話を聞き、「あなたが地域のためにできることを書きましょう。」（「おもてなしハンドブック」P10）に書き込みましょう。 ・自然が守られるように、環境に気を配ることは大切だ。 ・観光客に元気よく挨拶するなど、人に優しく接したい。	◆広い視野で考えられるよう、産業、文化、特産品など様々な視点を示す。 ◆地域人材（町役場の方）を活用し、道徳的実践に結び付けることができるようにする。
展開後半	○　グループの中でお互いに考えたことを交流し、全体に発表しましょう。 ・自分も共和町の一員としてはずかしくないように頑張りたい。 ・共和町を訪れる人に、町の魅力をどんどん伝えたい。	 ＜授業の様子＞
終末	○　今日の感想を書こう。 ・町で出会った人に、きちんと挨拶をすることも、地域の一員としてできることだと思った。 ・自分の住む町のことをしっかり話せるように、勉強をがんばることも大切だ。	◇自分の住む郷土のよさに気付き、郷土のためにできることについて、自分なりの考えをもつことができる。（ワークシート）

4　授業の記録

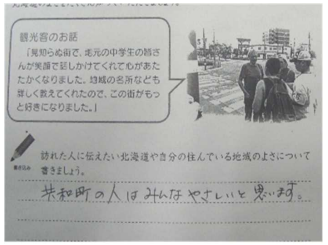
(1)　中心的な発問に対する子どもの反応

・人との関わりが大切であることが分かったので、子ども会やお祭りなど地域の行事に参加し、町民の方との交流を深めたい。
・スイカやメロンの生産量を増やすために、家の手伝いをすることもできる。
・中学生として、部活動でよい成績を残したり、将来有名人になったりして、町を有名にしたい。

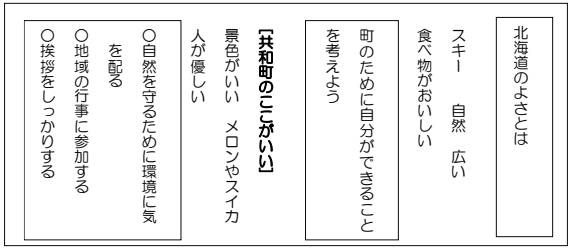
(2)　振り返りでの子どもの反応

・町役場の方の説明を聞いて、共和町の特色に加えて、町として課題となっていることも知ることができ、町のことを真剣に考えるきっかけになった。
・特別なことでなくても、中学生として地域のためにできることはたくさんあることに気が付いた。
・自分の地域の知らないことやよさをたくさん知ることができた。

5　板書、ノート等



＜「おもてなしハンドブック」への記述内容＞



＜生徒の思考を整理した板書＞

実践のポイント

○　地域の一員として生き方を深く考えることができるよう、展開前半で「おもてなしハンドブック」を活用し、自分にできることを考え、交流する場面を位置付ける。
○　進んで郷土を大切にしようとする態度を育てることができるよう、地域人材による講話など地域人材の活用を位置付ける。

総合的な学習の時間での活用

北斗市立大野中学校

中 学 校 第３学年	**単元名**　福祉を学ぼう～自分ができること～ **教材名**　「思いやり」（「おもてなしハンドブック　中学校」P6-9）

1　単元のねらい

高齢者の立場を疑似体験する活動や体験活動についてまとめる活動を通して、福祉の意義を理解し、その後の生活に生かそうとする。

2　単元について

本単元は、総合的な学習の時間に行う疑似体験学習と関連させて「おもてなしハンドブック」を活用することにより、表面的な「思いやり」ではなく、相手の気持ちや立場を尊重した上で自分にできることを考えさせることができる単元である。

「おもてなしハンドブック」を思いやりの心を伝える具体的な行動などについて考える場面で活用することにより、道徳的実践に結び付けることができるようにする。

3　単元の展開

過程	□主な活動　・子どもの反応	◆指導上の留意点　◇評価
課題の設定	□　体の不自由な人と出会った時の行動を考え、話し合う。 □　お年寄りや体が不自由な人に対して「本当の思いやりや親切とはどうすることか」という課題を設定し、疑似体験学習の計画を立てる。	◆本時のねらいに迫ることができるよう、「思いやり」「親切」という言葉を引き出す。 ◇自分の過去の体験や友達の考えを基に、自ら課題を設定している。（ワークシート）
情報の収集	□　グループに分かれ、疑似体験学習を行う。 ・足腰や視力が弱い高齢者の体験 ・足が動かず活動範囲も狭められる車いす体験 ・目が見えない状態で歩くブラインドウォーク体験 □　インタビューやアンケートを通して、体験した感想を収集する。 ・段差が怖かった。目が見えない人は大変だと思った。 ・見える時と違って、短い距離を歩くのにもすごく時間がかかった。 □　「『こんな時どうしますか？』③」（「おもてなしハンドブック」P9）の対応を考え、グループで話し合う。 ・バス停で並んでいる人が騒がしいと盲導犬が驚いてしまうのではないか。 ・自転車や荷物などで点字ブロックが隠れてしまうと、場所が分からなくなってしまうのではないか。	◆自分とは異なる立場の人々の気持ちを理解できるよう、疑似体験学習を行う。 <KJ 法を用いた話合いの様子> ◆多くの生徒が考えを出し、多様な考えに触れられるよう、小グループによるＫＪ法の話合いを取り入れる。 ◇課題解決に向けて、必要な情報を収集している。（ワークシート）
整理・分析	□　「思いやりの心を伝えましょう」（「おもてなしハンドブック」P6）を開き、「思いやりの心を伝える」ポイントについて具体的に考える。 ・「困っている」ということを相手が伝えやすくなるよう、こちらから挨拶をする。 ・音を立てないように静かにするなど、相手の立場に立って行動する。 □　前時までの疑似体験学習及びグループでの話合いから、「本当の思いやりや親切とはどうすることか」について考え、ポスターにまとめる。	◆困っている人に手を貸すことはもちろん大切だが、相手の状況や場合によっては、温かく見守ることも思いやりになることに気付かせる。 ◇収集した情報や様々な考えを比較、分類、関連付けてまとめている。（観察、ワークシート）
まとめ・表現	□　「本当の思いやりや親切とはどうすることか」というテーマを設定し、ポスターセッションでグループの考えを交流する。 □　本単元で学んだことを振り返る。	◆相手意識を大切にするという考えの交流ができるよう、話合いの視点を明確にする。 ◇「思いやりの心」を伝えることについて、自分の考えを見直すとともに、新たな課題意識をもっている。（発表、ワークシート）

4　授業の記録

(1)　「おもてなしハンドブック」P9 への記述

①　目の不自由な人がバスを利用する際に困りそうなこと

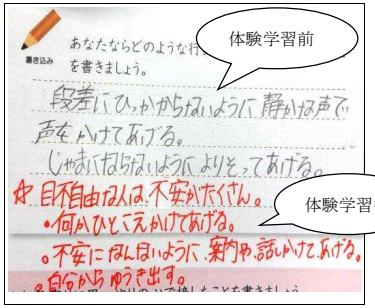
・「何か困ることがあれば言ってください」と声を掛ける。
・手助けが必要とされたら、方法などを聞いて手伝う。
・公共の場を利用するときは、誰かの迷惑にならないか常に考え、広がって歩かないなど、自分のできることを行う。

(2)　「おもてなしハンドブック」P6 への記述

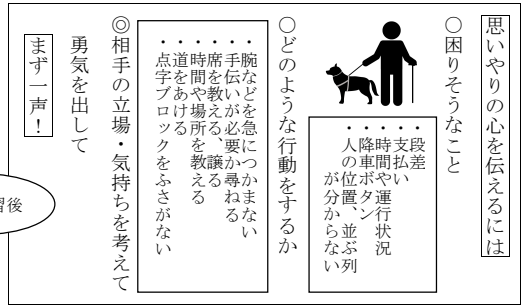
②　「思いやりの心を伝える」ポイント

・相手の気持ちを理解したら、話しかける等、言葉や態度で表すことが大切だ。
・明るい声で話しかけると、相手も安心し、困っていることを伝えやすい。
・どうすれば相手のためになるか考えて行動すると、相手も喜んでくれる。

5　板書、ノート等



<おもてなしハンドブックへの記述内容>



<生徒の思考の流れに沿った板書>

実践のポイント

○　思いやりの心についての考えを深めることができるよう、整理・分析などで「おもてなしハンドブック」を活用し、日常生活における行動等を考え、交流する場面を位置付ける。

○　福祉の意義を理解し、その後の生活に生かそうとすることができるよう、体が不自由な方などの疑似体験を行い、相手の立場に立った行動について考える場面を位置付ける。

技術・家庭科での活用

稚内市立稚内南中学校

中学校 第3学年	題材名　「わたしたちの地域と家庭生活と地域」 教材名　「わたしたちと家族・家庭と地域」（開隆堂「家庭分野」P22-27） 「あいさつ・礼儀」（「おもてなしハンドブック　中学校」P2-5）

1　題材の目標

家庭や地域の人々とのかかわりについて話し合うことを通じて、家庭や地域の人々とのつながりの大切さに気付くことができる。

2　題材について

本教材は、技術・家庭科（家庭分野）「A　家族・家庭と子どもの成長」の「(2)ア　家庭や家族の基本的な機能と、家庭生活と地域とのかかわりについて理解すること」及び「(2)イ　これからの自分と家族とのかかわりに関心をもち、家族関係をよりよくする方法を考えること」に関わる題材で、家庭や地域の人々とのつながりや関わりについて考えたり、交流したりする中で、礼儀正しく行動することの大切さについて触れる題材である。

「おもてなしハンドブック」を気持ちのよい挨拶などについて考える場面で活用することにより、道徳的実践に結び付けることができるようにする。

3　本時の展開

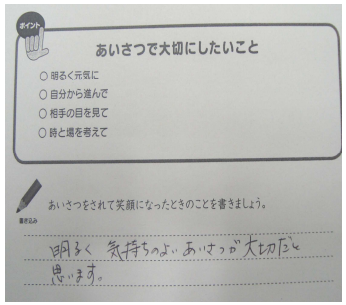
過程	□主な活動　・子どもの反応	◆指導上の留意点　◇評価
導入	□　地域には、どのような人たちが暮らしているか考える。 ・子ども　・高齢者　・外国の人 □　本時の課題 地域の人と協力して活動したり、関係をよりよくしたりするために大切なことを考えよう。	
展開	□　日常生活の中で、私たちは地域の方々とどのような関わりをもっているか考える。 ・地域の行事やお祭。 ・見かけたらお互いに挨拶をする。 □　考えた意見をグループの中で交流する。	◆ねらいにせまることができるよう、日常の生活場面を想起させる。 ◆自分の考えを深められるよう、グループの中でお互いに交流する。
	□　私たちが、地域の中でどのような行動を取っているか振り返る。 ・挨拶されたら返す。 ・自分から関わりを積極的にもとうとはしていない。 □　よりよい生活をしていくために、私たちが地域の中でできることは何か考える。 ・まずはしっかりと挨拶をする。 ・できるだけ地域の行事等に参加する。	◇地域の方々との関わりの中で、自分ができることについて考えている。 （記述内容）【工夫創造】
終末	□　本時のまとめ 地域の人と協力して活動したり、関係をよりよくしたりするために地域の行事に参加し、挨拶を積極的に行うなど、関わりをもつことが大切である。 □　気持ちのよい挨拶について、「おもてなしハンドブック」P2 を開き、書き込む。 ・相手の目を見て挨拶をする。 ・笑顔で挨拶をする。	

4　授業の記録

(1)　「おもてなしハンドブック」P2 への記述

・相手に気持ちが伝わるように挨拶をしていきたい。
・お互いに、気持ちがよい挨拶が大切だと思いました。
・心のこもった挨拶をしていきたいです。

5　板書、ノート等



＜「おもてなしハンドブック」への記述内容＞

「わたしたちの家庭生活と地域」
○日常生活の中で家庭と地域のかかわりは？
・スクールガード　・お祭
・行事　・挨拶　・町内会
地域の人と協力して活動したり、関係をよりよくしたりするために大切なことを考えよう。

○普段、私たちは地域の中でどのような行動を取っているか？
・挨拶されたら返す　・祭り参加

○中学生が地域の中でできる事は何だろう？
・自分から挨拶する
・積極的に町内の行事に参加する
・学校行事に地域の方を招待する・スクールガードの方々に感謝の気持ちを表す…
・積極的な関わりがない
地域の人と協力して活動したり、関係をよりよくしたりするために地域の行事に参加し、挨拶を積極的に行うなど、関わりをもつことが大切である。

＜生徒の発言を整理した板書＞

実践のポイント

○　気持ちのよい挨拶についての考えを深めることができるよう、終末で「おもてなしハンドブック」を活用し、日常生活における行動等を考える場面を位置付ける。
○　家庭や地域の人々とのつながりの大切さに気付くことができるよう、地域の人々とどのような関わりができるかを考える場面を位置付ける。

道徳の時間での活用

白老町立白老中学校

中 学 校 第３学年	**主題名**　心のこもった言動をとる　内容項目Ｂ〔礼儀〕 **教材名**　「無言化現象」（光村図書「きみがいちばんひかるとき」P12-15） 「あいさつ・礼儀」（「おもてなしハンドブック　中学校」P2-5）

1　本時のねらい

コミュニケーションの大切さを理解し、時と場に応じた言動をとろうとする態度を育てる。

2　教材について

本教材（「無言化現象」）は、見知らぬ人から何か尋ねられても応えない人が増えてきている現象を「無言化現象」という言葉で表し、話しかけられても応えないという行為が、相手の存在を認めないことと同じであることに気付かせることができる教材である。

①　都会の電車の中でよく無言化現象に出会うという筆者は、ある視覚障害者の文章を紹介する。

②　ある視聴覚障害者は、バスを待つときに列の最後はどこかと呼びかけるがだれも答えないことがあるという。

③　不安と差別感でいっぱいになり、無言化現象への抵抗として、列に並ばずに横から割り込んでバスに乗るが抗議の声も上がらないという。

④　「私の心の底にだけ傷ついた悲しみが深く残る」という言葉に、無言化現象のむなしさや残酷さが表されている。

「おもてなしハンドブック」を日常の挨拶や礼儀の大切さについて考える場面で活用することにより、道徳的実践に結び付けることができるようにする。

3　本時の展開

過程	○発問等（◎中心的な発問）　・子どもの反応	◆指導上の留意点　◇評価
導入	○　「相手の気持ちや立場を考えて会話をしましょう。」（「おもてなしハンドブック」P5）を読む。 ○　これまでに、だれかに挨拶をしたり話しかけたりしたときに、不愉快な対応をされた経験を発表する。 ・友達に挨拶したけど無視された。 ・話しかけたけど、無愛想に返された。	◆リード文を引用しながら、生活体験を想起させる。 ◆コミュニケーションに関わる経験を取り上げる。
展開前半	○　「無言化現象」（「きみがいちばんひかるとき」P12-15）を範読する。 ○　筆者のいう「無言化現象」とは、どのようなものでしょう。 ・何か言われても反応しない人が増えている。 ○　バス乗り場で対話を拒否された男性は、なぜ「不安と差別感」でいっぱいになるのでしょう。 ・弱者だと見下されているように感じるから。 ・自分の存在を認めてくれていないと感じるから。	◆静かに語りかけ、資料の世界に浸ることができるように範読する。 ◆できるだけ資料の状況をイメージさせて考えさせる。 ◇無反応が苦しみを与えているということに気付いている。（発言）
	◎　「人間として、向かい合うべきときに向かい合って言葉を発するという行為の意味」を考えてみましょう。 ・必要なときにはしっかりと言葉や態度で伝える。 ・人から何か尋ねられたら答える。	◇コミュニケーションをとることの大切さに気付いている。（発言）
展開後半	○　「笑顔の輪を広げましょう」（「おもてなしハンドブック」P3）を読みましょう。 ○　笑顔の輪を広げるような人との関わり方ができるようになるにはどうしたらよいか書きましょう。 ・聞かれたら積極的に答える。 ・明るく、元気に、コミュニケーションをとる。	◆挿絵の笑顔の写真を見せて、想像力を膨らませる。
終末	○　先生の話を聞きましょう。	◆道徳的実践に向けた意欲を高め、具体的な見通しをもつことができるよう、教師の体験に基づいた説話を行う。

4　授業の記録

(1)　中心的な発問に対する生徒の反応

・お互いに理解し合い、安心感を与えるような人との関わり方が大切である。

・助け合うために、伝えたり、聞いたりするなど、コミュニケーションの在り方が大切である。

(2)　終末での教師の説話後の生徒の感想

・挨拶や礼儀によって、人の気持ちを明るくすることができるので、どの人にも笑顔で接していきたい。

・友達の話を最後まで聞くことも礼儀であることから、聞く姿勢や聞き方にも気を付けていきたい。

5　板書、ノート等

<「おもてなしハンドブック」P4>

<生徒の考えを分類したり整理したりする板書>

実践のポイント

○　挨拶や礼儀の大切さについて考えを深めることができるよう、導入と展開後半で「おもてなしハンドブック」を活用し、日常生活における行動と関連付けて考える場面を位置付ける。

○　時と場に応じた言動をしようとする態度を育てることができるよう、道徳的行為の意味を問う場面を位置付ける。

道徳の時間での活用

本別町立勇足中学校

中学校 第３学年	**主題名** 社会に生きる一員として　内容項目Ｃ〔郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度〕 **教材名** 「私たちのふるさと」（「おもてなしハンドブック　中学校」Ｐ10-12） 「北の花咲かじいさん」（北海道版道徳教材「はあとふる２　中学校用」⑥）

1　本時のねらい

社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努めようとする態度を育てる。

2　教材について

本教材は、地域のよさや人々との関わりなどについて考えさせ、郷土に対する認識を深めていく。その上で、自分にできるふるさとへの貢献の方法など、郷土の発展に努める自発的な態度を養う教材である。

①　先人たちの努力と「ふるさと」の今、そしてこれからの発展について知る。

②　世界中から訪れる多くの観光客に、地元（北海道）のよさを知ってもらう。

③　人それぞれが抱く郷土への思いを知る。

「おもてなしハンドブック」を自分たちの地域の自然や優れた伝統、文化などについて考える場面で活用することにより、道徳的実践に結び付けることができるようにする。

3　本時の展開

過程	○発問等（◎中心的な発問）　・子どもの反応	◆指導上の留意点　◇評価
導入	○　「ふるさと」という言葉を聞いて、何を連想しますか。 ・山や川、田や畑。 ・懐かしいところ。 ・生まれ育ったところ。	◆「ふるさと」という言葉から、今、自分たちが住んでいる地域に目を向けられるようにする。
展開前半	○　「北の花咲かじいさん」を読んで話し合おう。 ○　浅利さんが松前町を桜の花で一杯にしようと考え、桜を復活させようとしたのは、どんな気持ちからでしょう。 ・みんなで花見を楽しみたい。 ・花見で町おこしをして明るい町にしたい。 ◎　「桜との60年間、失うものもたくさんあったが、得たことのほうがそれ以上に多かった。」の意味を考えてみよう。 ・桜が咲くまで大変だったが、咲いた時は嬉しかった。 ・多くの時間をかけた甲斐があった。	◆教師が範読する。 ◆浅利さんの心情を深く読み取らせ、いろいろな人からの協力や支えがあったことも押さえておく。 ◆桜を通して、長く町に貢献してきたことの苦労や大変さ、そして喜びを実感できるようにする。
展開後半	○　自分たちの力で、地域に住む人たちとともに、地域社会をよりよく発展させていくために、地域のためにできることを「おもてなしハンドブック」に書いてみよう。 ・ゴミを拾ったり、絵や花を飾ったりして、きれいで暮らしやすい町にする。 ・名物の「豆」をもっと多くの方に知ってもらう。	 ＜「おもてなしハンドブック」P10＞
終末	○　「勇足」のよさ、好きなところ、自慢したいことを挙げ、訪れた人に伝えたい自分の地域のよさについて短い手紙を書いてみよう。 ・自然のよさ（おいしい空気、山、川、畑など）。 ・人のよさ（友だち、家族、地域の方など）。	◇自分の住む地域を「ふるさと」と認識し、自ら関わりをもつ大切さやふるさとのよさについて気付いている。（記述内容）

4　授業の記録

(1)　中心的な発問に対する子どもの反応

・長い年月がかかったが、その分、喜びは大きかった。

・たくさんの失敗を乗り越えて、地域のためになる仕事を続けてきてよかった。

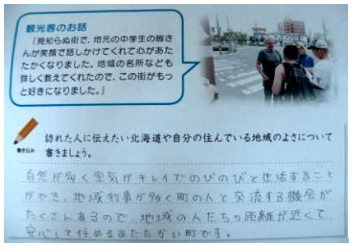
(2)　終末で生徒が書いた「ふるさと」に寄せる短い手紙

・きれいな空気の一角に、香ばしい香りが漂うところ。そこから見えるは大自然。心が落ち着くふるさと。

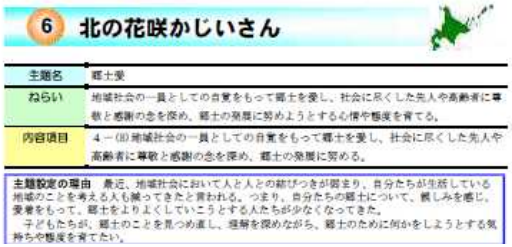
・何があっても、何もなくても、私のふるさと。

・夏はカエルの声、秋は虫の音、少しうるさい私のふるさと。

5　板書、ノート等



＜「おもてなしハンドブック」への記述内容＞



＜「はあとふる２」⑥＞

実践のポイント

○　地域の自然や優れた伝統、文化について深く考えることができるよう、展開後半で「おもてなしハンドブック」を活用し、地域のよさや素晴らしさについて書く活動を位置付ける。

○　郷土の発展に努めようとする態度を育てることができるよう、本時の学習を通して伝えたいと感じた地域のよさを手紙で表現する活動を位置付ける。